

問題・解答
用紙番号

55

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

二一世紀の先進国でのテロの多くは、その国の社会の内部が抱えている問題にイスラム過激派やIS^{*}がいわば「便乗」して起きているに過ぎない。そうであるならば、その国の問題がなぜ宗教的な位相をまとうようになったかを説明しなければならぬだろう。ここでは「ポスト世俗化」という議論を手がかりに、テロ激化の理由を探ってみる。

日本では聞かない「ポスト世俗化」という言葉は、二〇〇四年に西欧随一の知識人たるドイツのユルゲン・ハーバーマスと、翌年にベネディクト一六世としてローマ教皇に選出されるラッツィンガー教皇庁教理省長官とによる対談の場で用いられてから広まった概念だ。ハーバーマスは国家と市場から自律的な「公共圏」の概念を歴史的に描いたことで有名な哲学者であり、ベネディクト一六世は保守的な価値を唱えた厳格な教皇として知られる。

対談に際して問題ⁱティキⁱⁱを求められたハーバーマスは、市場や資本主義の力がますます増している現代にあって、文化的な品位や市民同士の連帯は、市民社会だけの手によらず、宗教共同体の助けも得て守られなければならないと訴えた。カトリックは、歴史的にみて、資本主義に対して批判的な宗教である。したがって、政治と宗教はこれまでのように対立するのではなく、協調関係を構築していくことが求められる状況こそが「ポスト世俗化」の時代だと表現した。

元来「世俗化」とは公的空間や公権力から宗教的性格を排除すること、すなわちカトリック教会の影響力を殺ぐ^くことを意味していた。また、科学技術の発達と高等教育が普及することで個人の信仰心は後退し、「脱魔術化」が進むと暗黙のうちに想定されてきた。近代とは、個人の自己決定権や科学的合理性の進展をみて、非合理で抑圧的な宗教的なものからのリベラルな離脱のプロセスだ

とみなされてきたからだ。オーギュスト・コント、ウェーバー、マルクスなど、名だたる人文社会
科学者らは、近代が進展していけば、宗教や信仰は後景に退くだろうと予想していた。人間の
A に信頼を寄せる考え方は、人びとを迷信から救い出し、合理性や実証に基づいて行動す
る世俗世界が到来することを予期させるからだ。

しかしハーバーマスがラッツィンガーとの対談で触れているように、二一世紀になって明らかに
なったのは、こうした世俗化が進めば進むほど「宗教の再興」が進むという逆説だった。彼は、
ニューエイジ運動、ヒンズー・ナシヨナリズム、アメリカの宗教右派、中国の法輪功、イスラム過
激派といった宗教原理主義が各地で生まれているとし、世俗社会が宗教との対話を怠るかぎり、宗
教的な意識はセンエイ化を余儀なくされることを予言した。この一五年以上前の予言は現実のもの
となった。

ハーバーマスら^bが先鞭^bをつけた「ポスト世俗化」論は、その後さまざまな意味合いで使われるよ
うになる。ここでは、相反するものとされてきた「世俗化」と「宗教意識」¹が、なぜ結びつくのか
に焦点を絞って論じよう。なぜ先進国で宗教をフックとしたテロが起きるのかの説明となるからだ。

ドイツの社会学者ベックは、世俗化と宗教意識がともに進展していくことは不思議なことではな
く、近代化と個人化が進んだことで起こる、当然の帰結という。それというのも、近代化が進み、
個人が集団や共同体、歴史的意識から解放されていけばいくほど、個人は伝統から切り離され、生
きていくうえで当たり前とされていた指針を見失っていくからだ。

当然とされていた歴史や伝統が失われていけば、人びとは自らのアイデンティティをパッチワー
クのかつ恣意的に、主体的に選択し、創造していく「再帰的近代」に生きるしかない。そこで立ち
現れるもののひとつが宗教的なものへの希求だ。つまり、もはや宗教が個人を操るのではなく、個
人が宗教を利用することになる。ベックの卓越な表現によれば、「愛の自動販売機」たる神がおり、
それは個人が必要な時に「ホットラインで呼び出される」のである。

ここでは、宗教は、「信仰の体系」ではなく、「個人の信仰」へと解消される。世俗化の流れのな
かで、宗教や教会の力は殺がれ、他方でリベラリズムの原理から、信仰は個人の内面の自由の問題
とされた。この二つが合わさることによって、宗教と個人はふたたび結びつくようになる。

この段階で、もしカトリック教会の司祭やイスラム教のイマーム（預言者）が、個人に対して命
令するような権威を持ち、それに信者が従わなければならないのであれば、人は自らの自由を奪わ
れることを警戒して、信仰心を持つとうとしないだろう。そうではなくて、自分のサイハイⁱⁱⁱで宗教を
どうにでも利用できることが、ポスト世俗の時代では人が信仰心を抱く最大の理由となる。個人の
自己決定権を前提とした新自由主義的な社会で自らの不遇や困窮が個人的なものであるとされれば、
人はそれを否定する説明や教義によって、その状況を否定する力を得ることができるとされれば、
れば、自らの不遇や困窮から脱することができなくなる。そのことが、多くの場合、社会の「弱

者」がテロリストへと転化していくことの説明ともなる。

ベックはまた、宗教とは、それがどのようなものであれ、国家を超えるグローバルな性質を持っていることに注意を促している。こうした指摘からは、国境に縛られないISは、個人に信じたいことを信じさせてくれる情報を絶え間なくみせてくれるインターネットという電子空間を使い、世俗的な利益を餌として個人に信仰心を植えつけることに成功した、きわめて現代的な宗教ということもできるだろう。

²ベックの「ポスト世俗化」の議論は、キリスト教を念頭に置いたものだが、先進国のホームグロウン・テロをも説明する。例えばフランス南東部イゼールでは二〇一五年一二月に、サラフィー運動に共鳴していたとされる人間が、その合わない職場の上司の頭部を切断し、職場だった工場のフェンスに「神は偉大なり」というアラビア語とともに突き立てるというおぞましい事件があった。同じ月には、職場の同僚を狙ったアメリカのカリフォルニア州のサンバーナーディーノでの乱射事件もあった。両者ともにISと何らかの接触があったことから、数多あるISテロのひとつとされているものの、組織から直接的に指示があったという決定的な証拠はみつかっていない。宗教テロの姿を借りた個人的な恨みや怨念による犯行だった可能性があるが、これも個人によって神が簡単に呼び出されたケースだ。

コミュニタリアン（共同体主義者）として有名な政治哲学者チャールズ・テイラーは、世俗化の進んだ歴史を精査し、近代的な理知によって宗教がクチクされたことは実際には一度もなく、現代にあっても、宗教的なもの以外に道徳上の源泉は存在しないと。例えば、人に固有の権利が認められるべきとする立憲主義の精神も、「人は神に似せて作られたから」ということ以外、その根拠を見出すのは難しい。だから、科学によって宗教は置き換えられることはない。例えば「2+2は4」という絶対的な定理が科学的に導かれたとしても、それで正義の実現や不条理が解消されるわけではない。正義や道徳の源は宗教によって供給されるしかない、と。

宗教が個人的な選択によって再興することになっている点で、テイラーはベックと同じ立場をとる。テイラーの見取図では、宗教と政治が一体で未分離だった「旧デュルケーム的世界」（聖俗の境界線を社会学者デュルケームが引いたところによる）は、世俗革命を経験し、良心や善悪についての判断が私的領域に任されるようになる「新デュルケーム的世界」へと移行し、さらに一九六〇年代以降に進んだ個人化によって、宗教という超越性が個人の手によって担われる「ポスト・デュルケーム的世界」へと変転してきたとする。一九六〇年代から七〇年代はまた、スピリチュアル世界やニューエイジ運動がブームになった「ポスト世俗化」時代のタンシヨ^vとなる。宗教が個人を操るのではなく、個人が宗教を操るようになるのは、社会が個人を単位とするリベラルの原理を取り入れるようになったからだ。

ちなみに、ベックもテイラーも「ポスト世俗化」は、自己救済を願う個人によるものであるから、

むしろ自分を破壊するような過激化は最終的には抑止されるはずとの楽観的な見方をしている点でも共通しているが、その見通しが誤りだったことは現状が証明している。

「ポスト世俗化」が進展していくメカニズムを明らかにしつつ、ベックとテイラーはそれがむしろプラスに作用することに希望をつないだが、ケペルは、悲観的な見方をしている。

ケペルは、ヨーロッパのカトリック教会、アメリカのプロテスタントイイズム、ユダヤ教、イスラム教のいずれでも、一九七〇年代半ばに大きな断絶を経験したとしている。この時代には、バチカンでは信仰よりも理性が重視され、教会の信頼失墜を取り返そうと、「再キリスト教化」（その代表的論者が先のラッツィンガー枢機卿とされる）が進められたし、アメリカでは社会改革や貧者救済に熱心な「リベラル・プロテスタント」が否定され、個人の救済により重きを置く福音主義が台頭していった。そしてこれはまた、個人の自由と責任を謳いあげるレーガン政権期の新自由主義の大地となったともいう。すなわち、個人主義という政治リベラリズムと、新自由主義という経済リベラリズムの共犯によって、政治的ラディカリズムは同時進行していったのである。

また、イスラムでも、イラン革命のように政治的なかたちで教義が影響力を発揮したことによる反省から、個人ひとりひとりの信仰を通じた世界の「再イスラム化」が実現されなければならないとする、下からのネットワーク運動がみられるようになった。世俗世界との分離に特徴づけられる「再宗教化」は、七〇年代に世界的規模で進んでいったのだ。

その理由としてケペルは、戦後の楽観的な世界観が、失業や環境、人口問題といった危機によって覆されたためだとする。

X

その限りにおいて、宗教性への回帰は、世俗世界と大きな断絶をもたらすものとして解釈される。だから、この本の関心に引きつけていえば、ポスト・デュルケームの時代は宗教と信仰を新たな争点として据えることになる。ケペルは、イスラム主義の専門家であると同時に、その非寛容性を強調することでも知られる。彼は、イスラム教は社会の構成原理を神のみに認める一元論をとるゆえ、民主主義社会と最も相性が悪い宗教だという。

テイラーとともに、コミュニタリアンの代表的な哲学者であるマイケル・ウォルツァーも、民族解放を経て建国されたイスラエル、インド、アルジェリアという三つの国を事例に、これらで独立後になぜ宗教的原理主義（シオニズム、ヒンズー過激主義、イスラム原理主義）がはびこるようになったのかの理由として、左派リベラル的な世俗主義の原理が、その国でもあまりにも優先されたことに理由を求めている。アルジェリアは一九六二年に宗主国フランスから独立するが、初代大統領に就任するベン・ベラは宗主国フランスのエリート層の知識に親しみ、イスラムよりも社会主義を重んじていた。イスラム教徒を解放するための独立戦争であったにもかかわらず、建国が宗教的要素を排除して世俗原理に基づくものであったために、抑圧された宗教的原理主義が台頭することになったとする。

このウォルツァーの見立ては、その後エジプトやリビアのように「アラブの春」*で解放されたはずの国々で、社会が自由になるどころか、宗教に基づく権威的な社会が生み出されていることの説明にもなっている。「啓蒙が反啓蒙を可能にした」という主張が正しいのとまさに同じように、解放運動のプロジェクトが宗教的熱狂の復活を可能にしたと論じることは可能である」（ウォルツァー）。ケペルは戦後の進歩史観への幻滅が宗教の再興を招き、ウォルツァーは宗教の等閑視が原理主義の台頭を招くとしている点では異なるが、いずれも世俗化が進めば宗教は後退していくことになるという B な解釈が間違いであることを論証している。

宗教は個人のアイデンティティ形成に直接的に作用し、人生の意味の供給源としての機能を果たしたが果たしていくことになるというのが「ポスト世俗化」の議論だった。それはまた、ニューライトが台頭するアイデンティティ政治を基礎とする時代と双子の関係にあるのだ。宗教テロと反移民テロは地続きの関係にある。

（吉田徹『アフター・リベラル』一部改変）

* IS……イスラム過激派組織の一つ。

* アラブの春……二〇一〇年末から二〇一一年頃に中東地域に広がった民主化と自由を求める運動。

問一 二重傍線部 i、v と同じ漢字を用いるものを、次のア、オのうちからそれぞれ選びなさい。

i テイキ

ア 政権交代のキウンが高まってきた。

イ 出席者はキリツと拍手で主賓を迎えた。

ウ ばかばかりのキソクばかりで嫌になる。

エ ますますのご活躍をキネン致します。

オ ヨキに反してよい結果となった。

ii センエイ

ア エイネン勤続で表彰された。

イ エイリな刃物で手を切ってしまった。

ウ 大統領が演説でゴエイをつける。

エ 会長のエイダンで危機を脱した。

オ かつてエイガを極めた一族も零落したものだ。

iii サイハイ

- ア 大きなカツサイとともに舞台の幕が下りた。
- イ これまでの実績が今回の失敗でソウサイされた。
- ウ 今後イツサイ関わりないと約束した。
- エ そのヨウサイは難攻不落で有名だった。
- オ そんなことをしてはテイサイが悪い。

iv クチク

- ア 中央アジアではボクチクが盛んだ。
- イ 将来のためにチヨクチクしておこう。
- ウ とうとう会社からホウチクされた。
- エ ハチクの勢いで勝ち進む。
- オ 昔のケンチク物を見て回る。

v タンシヨ

- ア この書類にジシヨと捺印をしてください。
- イ その件についてはゼンシヨを求めます。
- ウ キュウシヨを突かれて一瞬たじろいだ。
- エ トウシヨの計画は見直さざるを得ない。
- オ 古くからの行事のユイシヨをたずねる。

問二 波線部 a～c の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 余儀なくされる

- ア そうした方がよいと判断される
- イ そうするしかない状況にされる
- ウ それとは違う方法を提示される
- エ それは誤っていると指摘される

b 先鞭をつける

ア 他の人よりも早く始める

イ 将来のことに備えて準備する

ウ 何かが起きる前にそれを見抜く

エ それ以降誰も行わないことをする

c 等閑視

ア 最優先で対応すること

イ 先送りして時を稼ぐこと

ウ 無視して放っておくこと

エ 重視して丁寧に対処すること

問三 空欄

A

・

B

に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

A ア 公共心

B ア 一元的

イ 主体性

イ 相対的

ウ 道徳

ウ 直線的

エ 理性

エ 論理的

問四

傍線部1「相反するものとされてきた「世俗化」と「宗教意識」が、なぜ結びつくのか」とあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～エのうちから選びなさい。

ア 外形は異なっているが世俗化と宗教意識が同じ内実を持っていることが、近代化が進む中で明らかになってきたから。

イ 世俗化によって宗教の権威が小さくなり脱魔術化した結果、近代的な個人にとって、宗教への心理的抵抗が軽減されたから。

ウ 表面的には世俗化が進んでいるようにみえていても、人びとにとってこれまで当然とされてきた宗教や伝統を簡単に捨てることは難しいから。

エ 近代になり、世俗化が進むことでよりどころとなるものを失った個人が、新たなよりどころの一つとして宗教的なものを主体的に選び、利用するようになったから。

オ 世俗化とは公的空間や公権力から宗教の影響をなくすことであるが、これを突き進めた反動で私的空間や個人の心情にとって宗教が重要な位置を占めることになったから。

問五 傍線部2「ベックの「ポスト世俗化」の議論は、キリスト教を念頭に置いたものだが、先進国のホームグロウン・テロをも説明する」とあるが、先進国のホームグロウン・テロはどのように説明されるか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。なお、「ホームグロウン・テロ」とは自分が生まれ育った自国内で起こすテロのことである。

ア 多発している宗教テロを隠れ蓑にして、信者ではない人が個人的な恨みや怨念を晴らすためのテロを起こす。

イ 社会的弱者とされている人が、世俗的な利益を説く宗教原理主義者につけ込まれ、うまく使われる形でテロを起こす。

ウ 自分の置かれた状況に不満を持った人が、司祭やイマームの言葉に救いを見出し、自分を肯定されたと誤認してテロを起こす。

エ 近代化された社会で自らのアイデンティティが揺らいでいる人が宗教にのめり込み、神の権威を信じて神のためにテロを起こす。

オ 自分の困窮や不遇は自分のせいではないと考えたい人が、宗教の教義を自分に都合よく利用し、困窮や不遇から抜け出るためにテロを起こす。

問六 傍線部3「ベックとテイラーはそれがむしろプラスに作用することに希望をつないだが、ケペルは、悲観的な見方をしている」とあるが、三者の見解について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ベックは、全ての宗教は国家を超えるグローバルな性質を持っていることに加え、インターネットが普及したことによって「再宗教化」が可能となったとみている。

イ ハーバーマスの「ポスト世俗化」という概念を拡張したベックは、世俗化が進みリベラルな社会になると個人が幸せになり、宗教の過激化は抑えられると考えている。

ウ テイラーはコミュニタリアンであるが、世俗化が進めば人びとは宗教に関心を持つことはなくなると予測している。

エ テイラーは、科学によって宗教が置き換えられることはないとして、個人化の進んだ時代にこそ宗教の再興が必要だと主張している。

オ イスラム主義の専門家であるケペルはベックと異なり、イスラム教において「ポスト世俗化」が進むのは困難だとの見方を示している。

カ アメリカでは、宗教が個人の救済に重きを置くようになったことを基盤として経済リベリズムも進んでいったとケペルは説明している。

問七 空欄

X

に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 現世への幻滅は、新たな救済を約束してくれる宗教への期待へと転じる
- イ 現在の多くの問題は、宗教を軽んじる世俗化によって引き起こされたのだ
- ウ 現実世界の不幸は、信仰によってもたらされる心の平安によって解消される
- エ 個人の内面の信仰を保障する再宗教化こそが、世俗世界の安定の源泉たり得る
- オ 個人の救済は大きな問題だが、同時に全体の幸福を祈る宗教を再評価すべきなのだ

問八 傍線部4「解放運動のプロジェクトが宗教的熱狂の復活を可能にした」とはどのようなこと

- か。アルジェリアを例として述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。
- ア 民族解放のためには資本主義を利用する必要があったが、元来イスラム教は資本主義に批判的な宗教であることや市場経済の失敗もあり、宗教の力が以前にも増して強くなった。
- イ イスラム教徒を宗主国から解放するための独立運動であったのに、その後、世俗原理に基づく国づくりを行ったため、おさえつけられた宗教的な原理主義が反発して勢いを増すようになった。
- ウ 厳しい宗教的戒律が日常生活にまで課されているイスラム教社会で、自由を求める解放運動が成功した結果、人びとは指針を失い、元の宗教を中心とした社会を望むようになった。
- エ イスラム教は民主主義社会と最も相性が悪い宗教であるにもかかわらず、イスラム教から民衆を解放しようと民主化を進めたために、民衆の賛同を得られず信仰をより深めることになった。
- オ 政治から宗教を解放しようとする動きがイスラム教世界に浸透したが、同時に、個人の内面の自由としての信仰が潜行して強められ、やがて表面化して、政治に影響を及ぼすまでになった。

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

飢餓とは通常、活動に必要なエネルギー(熱量)を摂取できていない状態を意味する。しかし、人間が食べものから摂取するのはエネルギーだけではない。多量栄養素(炭水化物、タンパク質、脂肪、多量ミネラル、水)や微量栄養素(ビタミン、ミネラル)もまた、人間活動を維持する上で不可欠な栄養である。

世界保健機関(WHO)では栄養不良^Aを「エネルギーおよび/または栄養素の摂取量の不足、過剰または不均衡」と定義しており、飢えは栄養不良のひとつの形態に過ぎない。低栄養は栄養素が足りない状態で、飢えもここに含まれる。一般的にはエネルギーや多量栄養素の不足を指すが、微量栄養素の不足を意味する場合もある。微量栄養素欠乏は、エネルギーが十分に摂取できている場合、すなわち飢えていない場合にも起こりうる点が厄介だ。一方、過栄養とは、エネルギーまたは特定の栄養素の過剰摂取状態を意味し、肥満や生活習慣病の原因となる。栄養の過剰や不足は、病気などのために十分に栄養を代謝できない場合や必要な栄養量が増大する場合にも生じるが、食料へのアクセスの不十分さもまた重大な原因のひとつである。

栄養摂取の量的な関係は複雑で、糖質のように最大許容量が定められているものもあれば、繊維質のように最低必須摂取量が定められている場合もあり、また、ビタミンやミネラルのように摂取可能量に上限と下限が定められているものもある。

第二次世界大戦の終結からおよそ五〇年が過ぎた二〇世紀末、農業生産性は飛躍的に向上し、飢餓に苦しむ人々の絶対数は減少した。しかし、それでも飢餓がなくならないこと、それ以上に栄養不良に苦しむ人々がいることから、一九九二年、国連食糧農業機関(FAO)はWHOとともに、第一回国際栄養会議を開催した。これは栄養をテーマとする初の国際的な会議で、世界一五〇ヶ国以上から代表が参加した。このとき採択された世界栄養宣言では、「飢餓をなくし、あらゆる形態の栄養不良を軽減する」ことを宣言しただけでなく、「私たちは、栄養的に適切かつ安全な食料を入手することは、各個人の権利であることを認識し、また、世界的にみればすべての人に十分な食料があり、不公平なアクセスが主な問題であることを認識する」と述べ、アクセスの問題についても触れている。

^B 栄養不良にはどのような健康影響があるだろうか。低栄養による最も急性の健康影響は餓死であるが、低体重の原因となり免疫システムを弱らせることも重大な影響である。低栄養は、また、貧困と悪循環の関係を成している。すなわち低栄養による病気やエネルギー不足のために十分に働くことができないと、収入を得ることができず、食料や衛生のために必要な投資を行うことができないので、栄養状態が改善しない。加えて、乳幼児期の低栄養は子どもの身体的・知的発達に遅れを引き起こすため、その後の就学状況や労働生産性を損なう可能性があるのである。このような構造

は、将来的に国や地域の発展を阻害する要因となりうる。

過栄養もまた問題だ。過栄養は肥満や生活習慣病につながり、若年死亡や慢性的な疾病の要因となりうる。いくつかの種類のがん、心臓病、二型糖尿病、脳血管疾患などは肥満を原因とするが、このような非感染性疾患は、二〇世紀後半において、感染症に代わる主要な死因となった。また多くの場合、徐々に悪化する慢性的な疾患で長期にわたる治療が必要となるため、生産性の低下や医療費・社会保障費の増加につながっている。

すなわち、栄養不良はいずれの形態においても、社会的・経済的なコストを発生させているのである。世界経済のさらなる発展のためには、国際社会が一丸となって栄養不良の改善に取り組む必要がある。

栄養不良問題は、長らく高所得国における過栄養と中・低所得国における低栄養だと考えられてきた。しかし、二〇〇六年にアメリカの栄養学者であるバリ・ポピンは、食生活の変化と運動強度の低下のために中・低所得国においても肥満が増加しており、世界規模で「栄養転換」^Cが生じつつあると指摘した。

ポピンは食生活と運動のパターンが変化すると、栄養状態が変化し疾病のパターンも変化すると述べた。具体的には、脂肪、砂糖、肉類、加工食品が多く繊維質が少ない食事、座りがちで運動が少なくなる暮らしによって、肥満が増加し、非感染性疾患が増加する。このような生活様式の転換は、都市化、所得の向上、スーパーマーケットの普及などの地域的な要因と、自由貿易体制の確立、多国籍食品企業の現地進出、食品メーカーによる積極的なマーケティングなどの産業構造変化が互いに連関して生じる。

世界的にみれば、肥満は一九七五年から三倍近くに増加している。二〇一六年には一八歳以上の成人のうち一九億人が、そして二〇二〇年には五歳未満の子どものうち三九〇〇万人が過体重であった。現在、世界の人々の住む国の多くでは、低体重よりも過体重や肥満が主たる死亡の原因となっている。

さらに問題なのは、現在の世界では、過栄養と低栄養が同時に起こっていることだ。過栄養が世界を覆う一方で、絶対数が減っているとはいえない、いまだに飢餓は存在している。地理的にみると、飢餓人口が多いのはアジアだが、アフリカでは人口のうち飢餓に苦しむ人が占める割合が高く、また子どもの低栄養が依然、増加傾向にある。先進国もまた低栄養と無縁ではない。微量栄養素欠乏のような隠れた低栄養もあれば、普通の意味での飢餓もある。例えば、イギリスでは二〇一五年、人口の三%が飢えていたとされる。このように過栄養と低栄養が同時に起こる「栄養不良の二重負荷」の状態は、ひとつの地域、ひとつの家庭のなかでも生じ、時には一人の人間の身体の上ですら起こりうる。例えば、肥満は微量栄養素の欠乏と関連している、また、成人の肥満は幼少期の低栄養に起因する、というように。したがって、栄養不良を改善していくためには、

ア。

すでに述べたように、世界全体にみられる「現代的な食生活」は、栄養転換を引き起こし、過栄養状態を促進させた要因のひとつである。現代の食生活の特徴は、脂肪分（特に動物性由来のもの）、砂糖、加工品の取り過ぎと、繊維質の不足だが、このような食生活の変化はどのように世界各国で生じたのだろうか。

所得が向上すると一般に主食以外の食品を購入する機会が増える。いわゆる昔ながらの地域の「市場」では品揃えに限界がある一方、都市に普及しているスーパーマーケットには豊富な品揃えがある。卵や乳製品、肉類といった動物性食品や、清涼飲料水、スナック菓子などの塩分や糖分の多い加工食品などは、スーパーマーケットで簡単に購入することができる食品である。また都市的なライフスタイルでは、食料の入手や調理にあまり時間をかけられないことが多く、簡便な調理済食品や冷凍食品がより好まれる傾向にある。

大規模なスーパーマーケットチェーンは、通常、グローバルフードチェーンとつながっていて、世界各地から商品を仕入れている。食品業界では国際的な経営統合が進んでいるため、大手食品メーカーは先進国だけではなく途上国にも進出し、現地で工場を建設し、独自のサプライチェーンを構築して、清涼飲料水、スナック菓子、ファストフードなどの加工度の高い食品を販売する。したがって、スーパーマーケットで販売される農畜水産物や加工度の高い食品は、品揃えが豊富だけでなく安価でもある。また加工食品は常に、刺激的な広告や宣伝を伴い、メディアを通じて人々の購買意欲を煽っている。

このように、所得向上やグローバル化により、多国籍企業による食品産業の寡占といった社会経済要因の変化が、フードシステムの変化の基盤となっている。したがって現代の健康的でない食生活の浸透は、個人の食の嗜好や選択の蓄積というよりも、人々をそのような選択へと仕向けるフードシステム（あるいは食品産業）全体の構造によって導かれているともいえる。

過栄養による肥満は非感染性疾患の原因となり、患者本人の生活の質を下げるだけでなく、社会保障費や医療費の増大などに寄与することで社会的なコストを増加させている。FAOによれば、二〇一〇年の非感染性疾患の累計コストは約一・四兆米ドルにのぼる。これは現代の食生活の隠れたコストのひとつであるが、環境破壊というもうひとつのコストも隠されている。

なぜ、健康に悪い食品は安いのか。それは工業的農業による効率的な大量生産と、グローバルな世界市場における規模の経済に支えられているからである。世界で生産されている商品作物について生産量（重量）のランキングをみると、サトウキビが第一位、てんさいが第一〇位を占める。両者を合計すると、砂糖原料はコムギ、コメ、トウモロコシといった主食になる穀物よりも多く生産されていることになる。また世界が豊かになると肉の消費量が増えることが知られているが、五〇年前に比べて世界では三倍以上の食肉が生産されており、毎年、世界では八〇〇億頭の家畜が食べられている。牛乳の生産量も二倍以上と伸びている。そしてそれほど多くの家畜を飼うために、世

界の穀物栽培用農地の三分の一以上は飼料作物の栽培に使われている。

このような食の大量生産は、複数の点で、環境に負荷をかける。まず農地を開発するための森林伐採や埋め立てなど、大規模な土地利用の変化がある。気候変動の要因となるだけでなく、多くの生物の生息場所の減少につながる。また肥料、農薬、餌、抗生物質などの形で、化学物質が環境中に多量に投下される。環境中に残存し、水質や土壌を汚染するほか、地球規模でのリンや窒素の循環をかく乱する。農業用水のための灌漑^{かんがい}や地下水の汲み上げが大規模に生じると、地域の水資源が枯渇したり、地下水位の低下が生じたり、塩害が起こったりする。遺伝的な問題もある。遺伝子組み換え農産物の導入については議論が多いが、それだけでなく、収量の多い特定の品種に栽培が集中すると、作物の遺伝的多様性が減少する。

工業的農業の一形態である工業的（あるいは工場型）畜産には、より深刻な問題がある。大規模に動物を飼うことよって発生する大量の糞尿の問題、また過密状態で飼育するために不可欠となる抗生物質や動物用医薬品の多用の問題、そして生産性を第一とするために身動きの取れないケージで飼育するという動物福祉の問題などは、工業的畜産に固有の問題といえるだろう。

また、このような工業的農業の「環境」問題は、往々にして社会倫理的問題とともに現れることについても注意しなくてはならない。大量に農薬を散布するあまり愉快ではない農業現場は、移民や女性、児童といった安い労働者によって支えられている。農地開発のために切り開かれた森林は、地域の人々（時として少数民族）が、薪を拾ったり動物を捕まえたりして生活の糧を得ていた場所かもしれない。遺伝子組み換え農作物を開発するのは、豊富な資金力を持つ大企業であり、特許で保護されたその種子は、肥料や農薬とパッケージで販売され、農家はただそれらを購入するしかない。そして、原料の生産から加工、販売までをコントロールする大規模な食品メーカーは、小規模農家がたちうちできない価格で、市場を支配するかもしれない。

つまり、過栄養を引き起こす健康に良くない食生活は、社会や環境の持続可能性をも損ないかねない食料生産・流通構造によって実現されているのである。

人間の健康と社会や環境の持続性の双方にとって好ましくない現代の食生活であるが、それが主流化した背景には、個々人の食べものの嗜好や食べ方から世界的な食の生産と流通の構造、科学技術の進歩といったさまざまな社会経済要因が、複雑に入り組んで存在している。

栄養転換を提唱したポピンは興味深い指摘をしている。それは、現代の栄養過多な生活を引き起こしている運動強度の少ないライフスタイルや、肉類と砂糖、加工食品に富む食事は、より良い暮らしを求めた人間社会の発展の末に生まれたものでもあるということだ。水源まで長い道のりを歩き、水を汲み、水の入った重い容器を抱えて自宅に戻るような生活は、運動強度にこそ富んでいるが、必ずしも好ましい暮らしとはいえないだろう。上下水道の整備は、こうした生きていくための激しい労働から人間を解放するだけでなく、汚染されていない水へのアクセスも提供している。

同様に、工業的農業の発展は世界の食料生産量を押し上げた。穀物生産量の増加率は世界人口の増加率を上回っており、現在、世界全体で生産される農産物の総カロリーは世界人口が必要とするカロリーの二倍以上を誇っている。また、工業的畜産によって卵や酪農品、肉類へのアクセスが増えたことよって、動物性タンパク質の摂取が増え、栄養の改善や寿命の伸長につながっている。肉類や糖分は、多くの人にとって美味しさを感じさせる食べものでもある。所得が上昇し生活に余裕のできた人々が、より美味しいものを食べたいと思うようになることを責められるだろうか。

現状、食・健康・環境はトリレンマの状態にあるのである。食の楽しさや便利さを極端に追求すれば、健康や環境の持続可能性は損なわれるだろう。かといって環境のみを重視すると、栄養に富んだ食料を十分に供給することはできないかもしれない。さらに健康的かどうかだけで食のあり方を選べば、多様で豊かな食文化は存続できないかもしれない。

つまりこれは社会科学でいわれる「厄介な問題」^E「利害関係者が多く、前例がなく、ひとつの問題の解決が次の問題を生むような問題」^{*}なのである。人新世において人間らしい暮らしを保ちつつ、健康に食べ続けるためには、この三すくみから脱出しなければならぬ。食・健康・環境のいずれにおいても高い品質を保ちつつも三方良しとなるような、新しいバランスを見つけることが必要とされている。

(田村典江「食と健康と環境」一部改変)

* トリレンマ……三すくみ。

* 人新世……「ひとしんせい」あるいは「じんしんせい」と読む。人間の諸活動が長期的かつ大規模な影響を与えるようになった地質時代のひとつ。

問一 傍線部A「栄養不良」について、WHOの定義にもとづく説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 栄養不良とは、栄養素が足りない状態のみを指す。
- イ 栄養不良とは、多量栄養素など特定の栄養素が不足している状態を指す。
- ウ 栄養不良のうち、微量栄養素が問題となるのは過栄養の場合のみである。
- エ 栄養不良は、エネルギーまたは特定の栄養素の過剰摂取状態を含む。
- オ 栄養不良は、食料供給が十分であれば防ぐことが可能である。

問二 傍線部B「栄養不良にはどのような健康影響があるだろうか」とあるが、その答えとして最も適切なものを、次のア～カのうちから選びなさい。

ア 低栄養は、感染症に代わる主要な死因である非感染性疾病を引き起こす。

イ 低栄養は、心臓病、二型糖尿病、脳血管疾患などを引き起こす。

ウ 過栄養は、慢性的な疾患で長期にわたる治療が必要な健康問題を引き起こす。

エ 乳幼児期の過栄養は、子どもの身体的・知的発達の遅れを引き起こす。

オ 栄養不良は、徐々に悪化する慢性的な疾患により過栄養を引き起こす。

カ 栄養不良は、免疫システムを弱らせ、慢性的な感染症を引き起こす。

問三 傍線部C「栄養転換」について説明した最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 栄養転換とは、高所得国において低栄養が発生する一方で、中・低所得国において過栄養が発生している世界的な逆転現象を指す用語である。

イ 栄養転換とは、中・低所得国においてのみ見られる、食生活の変化と運動強度の低下のために肥満が増加するなかで見られる多様な社会現象を指す用語である。

ウ 栄養転換とは、世界経済のさらなる発展のために国際社会が一丸となって推進している、低栄養状態から脱却するための社会目標を指す用語である。

エ 栄養転換とは、多国籍食品企業の現地進出、食品メーカーの積極的なマーケティングなどの産業構造変化により、栄養状態の向上が進む一連のプロセスを指す用語である。

オ 栄養転換とは、脂肪・砂糖・肉類・加工食品が多く繊維質が少ない食事や運動量の減少など、肥満や非感染性疾病の増加につながる食と運動のパターンの変化を指す用語である。

問四 空欄 ア に当てはまる最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 先進国における低栄養を防ぐ必要がある

イ 食と栄養の構造全体に介入する必要がある

ウ アジアにおける飢餓人口を減らす必要がある

エ 栄養不良の二重負荷を解消する必要がある

オ 隠れた低栄養を見えるようにする必要がある

問五 傍線部D「このような食生活の変化はどのように世界各国で生じたのだろうか」とあるが、その答えとして適切なものを、次のア～オのうちから二つ選びなさい。

ア このような食生活の変化は、個人の食の嗜好や選択の蓄積の結果というよりも、健康的でない食生活を選択するよう仕向ける食品産業全体の構造により生じている。

イ このような食生活の変化は、グローバルゼーションにより、伝統的な市場においても、簡便な調理済食品や冷凍食品が簡単に購入可能となったことにより生じている。

ウ このような食生活の変化は、所得向上やグローバルゼーション、多国籍企業による食品産業の寡占など、フードシステム全体の構造が世界的に変化したことにより生じている。

エ このような食生活の変化は、所得向上に伴い変化した人々の嗜好に対応して、糖分の多い加工食品を大量供給するようになったフードシステムの構造により生じている。

オ このような食生活の変化は、グローバルフードチェーンが、健康的でない食生活を好む個人の食の嗜好や選択に関する情報にもとづいて購売意欲を煽たったことにより生じている。

問六 傍線部E「厄介な問題」は、この前に挙げられる様々な問題によって引き起こされている。

次のア～カのうちから、その問題として適切なものを二つ選びなさい。

ア 工業的農業によって、効率的に大量生産されたサトウキビやてんさいなどの砂糖原料が家畜の飼料として用いられることでより多くの家畜を飼うことが可能になった一方で、その生産過程では土壌汚染による環境負荷が高まっている。

イ 工業的農業では、森林伐採や埋め立てなど大規模な土地利用の変化によって農地が拡大し、穀類の収穫量が飛躍的に増大したが、一方で、森林伐採が引き起こした気候変動により、地域の水資源の枯渇や、地下水位の低下、塩害などの環境問題が発生している。

ウ 工業的畜産によって食肉や牛乳の生産量が増加する一方で、生産性優先によって家畜の生育環境が劣悪になる動物福祉の問題、抗生物質や動物用医薬品の多用の問題など、工業的畜産に固有の環境問題が発生している。

エ 工業的農業の労働現場では、移民や女性、児童といった従来の低賃金労働者が生産過程から排除され、遺伝子組み換え農作物を開発している大企業から種子を購入する農家のみが優遇されるといった社会倫理的問題が発生している。

オ 大規模な食品メーカーは、種子と肥料の独占的な販売を行うとともに原料の生産から加工、販売までをコントロールすることで市場を支配しているが、この結果として地域の人々の農産物の生産量が減少する社会倫理的問題が発生している。

カ 工業的農業による効率的な大量生産と、グローバルな世界市場における規模の経済に支えられて健康に悪い食品は安価であるが、その生産・流通の過程ではさまざまな社会経済要因が複雑に入り組み、環境負荷や社会倫理的問題が発生している。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア FAOはWHOとともに一九九二年に国際会議を開催し、農業生産性の低さが栄養不良の主たる問題の一つであることを世界栄養宣言の中で述べた。

イ 栄養不良は、健康不良の問題であるのと同時に、貧困との悪循環や、就学・就労の困難、労働生産性の阻害などにつながり、国や地域の発展を阻害する要因となる。

ウ 都市的なライフスタイルでは、簡便な調理済食品や冷凍食品がより好まれる傾向にあるが、これらの食品摂取を続けると脂肪分、砂糖、繊維質の不足につながる。

エ 多くの国では、過栄養と低栄養が同時に起こっているが、過体重や肥満よりも低体重が主たる死亡の原因である。

オ ポピキンによれば、現代の栄養過多な生活を引き起こしているライフスタイルや食事は、より良い暮らしを求めた人間社会の発展の末に生まれたものでもある。